

農林水産政策研究所設立20周年に寄せて

ノートルダム清心女子大学 人間生活学部 人間生活学科 教授 清水 純一

政策研が20周年なので何か書けという。私は政策研の前身である農業総合研究所（総研）に学部卒で1980年に入ったので、政策研というよりも総研出身という意識の方が強いような気がする。ただ、今回確認したところ、最初に総研に18年、JICA専門家としてブラジル赴任生活3年、政策研16年ということで、総研時代と政策研時代は長さでいえば大して変わらないことに気がついた。人間の記憶なんていい加減なものである。多分、若い時の記憶の方が鮮明に残っているのであろう。

総研時代からシーラカンスのように生き残っていた、私のような研究職にとって総研から政策研になって大きな違いは行政官の方々との付き合いが増えたということだろう。ブラジルから帰国して2年後には経済企画職員研修の担当を拝命し、秘書課に研修生の派遣をお願いしたりしたが、それまで本省に足を踏み入れたことはあまりなかった。昔の研究者から見れば、本省の人は研究所をいじめる存在であり、逆に行政官から見れば、研究者は役に立ちもしない研究をしている、ただ飯を食っている穀潰しというイメージだったような気がする。

一番、行政に携わっている人との接触が増えたのは現在の企画広報室の企画科長と総括上席研究官を務めた4年間（2006～2010年）であった。特に企画科長の時は、本省と研究所との間での研究課題の決定プロセスなどが確立していないこともあり、摩擦もそれなりにあったが、徐々にルーティンが確立していったように思う。それ以外にも、西ヶ原から現在の合同庁舎第4号館への移転などいろいろ懸案事項があったが、当時の所長、次長、企画連絡室長、庶務課、会計課を始め、政策研究調整官や政策研究調査官などに行政経験のある優秀な方が多くいたので、非常に助けられていた。

もともと研究職である私は自分の仕事でありながら、どこか傍観者的に見ていたような気もする。企画科長時代には庶務課長会議などという、各局の総務課長が集まる、それまで存在も知らなかった会議を傍聴したり、総括上席研究官時代に

は局議に出席するというのも総研時代には考えられなかったことであろう。まるで、田舎から上京した若造が初めて東京という大都会を見てびびっているような感じだった。また、当時私が出席していた局議では、政策研の研究成果を毎回数分で報告させられ、これには本当に参った。あの時ほど他人の研究を勉強したことはなかっただろう。

そういう中で印象深かったのは、行政官の方々が非常に該博な知識・見識を有していたことである。並の大学教授など顔色を失うような方もいた。それにつけて思うには、こういう方々の第二の人生を大学の教育で生かしてもらえないかということである。大学というと博士号を取得していないといけないと勘違いされているかもしれないが、文部科学省が定めている教授の資格の一つにいわゆる「実務家教員」というものがある。これは論文等の研究歴や教育歴を問わないというものである。しかも、現在、大学には授業の一定割合が大学以外の実務経験のある教員が担当することも求められている。その経験を民間企業や団体で生かすのも有意義なことと思うが、これからの日本を担う若い世代に自分の経験を伝えるのも有意義なことではないだろうか。

最後に、いずれは大学に移籍したいということを考えている現役の研究者の方々にお伝えしたいことがある。よく言われることだが、改めて強調したいのは研究環境としては政策研が最高であるということだ。行政の要望に対応するのは、当然として、それを利用して論文に仕上げるのは大学に比べて一日の長がある。行政に貢献しつつ、どんどん論文を量産して、50歳を過ぎてから教授で大学に移れば良いのではないか。各大学の内部規定にもよるが、准教授で移ってから教授に内部昇格するのはいささか面倒である。

